

## 「木更津こどもまつりの原則」

目的 少子化対策／子育て支援を目指す（結果として大いなる「街おこし」になる。）

日時 毎年 11 月の第 3 土曜日 10：00～14：00（雨天順延）

会場 木更津駅西口の旧寺町界隈

本部 0438-22-3630／子育てセンター「ゆりかもめ」内

## 木更津こどもまつりのイメージ

### 1 基調となるイメージ

昭和 30 年代の木更津（日本）が再現された——という感じを基調とする。

程ほどの貧乏（食欲でなかった。）

希望（何も決っていなかった。）

生き生きとしていた（やれば報われた。）

よそよそしくなかった（みんな一緒だった。）

気安かった（気取る必要がなかった。）

励ましあっていた（お互い様。助け合うしかなかった。）

大まか（細かな事をいうと笑われた。）

伝統情緒（昔：昔の人が生きていた。）

### 2 基本のイメージ

#### ア 全体の風景

木更津の街の中に、幼い子等を連れた親子の群れが、溢れかえる。

街中の人（お母さん・お父さん・ご老人・おばさん・乳幼児・小中高大学生・お兄さん達等）が出てきて、「やあやあ懐かしいと言って人に出会い、ご老人は子供達の可愛い姿を見て「もう少し頑張ろうか」と元気が出る。

子供たちにとって、60 年後に思い出すかも知れない、人生の原風景の 1 つになる。

#### イ 若い親子たち

若い親子たちは、郊外の量販店・大スーパーにいるときの様に、受身なのに大柄（おおへい）な消費者、お金を持っている限りでのお客として振舞うのではない。買い物に行くように、物を買うためにそこにいるのではない。チャホヤしてもらいたくてそこにいるのではない。

若い親子たちは、そこで積極的に自己を発揮している。自己を発揮している。自己を表現している。主役になること。自発的に出店し企画をする。自分から世界を動かそうとしている。こどもまつりの全体的な結果がどうなっても、自分達としては、やれるだけの事をやれたなあと自己満足できること。

#### ウ 「福祉はただ」を止める

学童保育所のゲームコーナーも1回10円程度の有料制とする。「売りっこ買いっこ」を幼児も楽しむべき事。学童も微々たる値段でも自分の手で儲けてみる。

儲けがあるとしても、微々たる金額である事。プロの出店が営業販売の虚（むな）しく思える程度の相場設定とする。1品100円程度を最高額とする。

#### エ 人と人が繋がる

若い親子たちは、ばらばらに勝手にお買い物をするのではなく、人と繋がろうとする。人と一緒に何かをしようとする。一緒に楽しみ感動しようとする。「1人で密（ひそ）かに」はここでは棚上げ。自発的な共同作業。壮大なる共同行為。主客が随時入れ替わる。

#### オ 人とお店が繋がる

当日、会場内の各店舗は通常の商売をして欲しい。そのため土曜日が選ばれた。

「ゆりかもめ」に出入りする親達は、地域のお店に入りたいが、きっかけをつかめないでいる。スタンプラリー等によってお互いに顔見知りになって欲しい。

#### 3 発足のきっかけ

7年間にわたり開催された「青空クラブ合同運動大会」：地域子育てセンター「ゆりかもめ」主管：が参加者500人を超えて急激に大規模化した。見ているだけの人が増えすぎて、不満が続出した。平成15年11月のことだった。

「ゆりかもめ」所長宮崎はその廃止を決めて、代わりに「木更津こどもまつり」を提唱した。平成16年4月のこと。

そもそも運動会が屋外の企画であったので、木更津市総合福祉会館や市民会館等の室内での実施を初めから私どもは避けた。地域空間そのものを会場にしたかった。

天候に左右されるという弱点は残るが、街という会場は①定員がない。②閉鎖的でなく丸見えで、公開されている。③飛び入りが可能である。④偶然の逢いなど無限のご縁がある。⑤外から色々評価注文チェックをうけられる。

結果として、木更津駅西口に賑やかさを再現したかった。街の中に人と人の心が響き合う昭和30年代の故郷のイメージを再現したかった。

そして、今まで失敗してきた街おこし企画とは違う何かがあれば、また沈没する——という恐れを忘れない決意をした。それが「子育て支援」という切り口です。

#### 4 この企画を長続きさせるための振る舞いの基準（直視・公開・変革）

強い組織（街・社会・人）は、自分を直視する力を持つ。

強い組織（街・社会・人）は、人に自己を公開する事を好む。

強い組織（街・社会・人）は、自己変革できる。